

平成 26 年 6 月 18 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(A)

研究期間：2010～2013

課題番号：22242029

研究課題名(和文)フード・セキュリティの人類学的研究

研究課題名(英文)Anthropological Study of Food Security

研究代表者

栗本 英世(KURIMOTO, Eisei)

大阪大学・人間科学研究科・教授

研究者番号：10192569

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 36,800,000円、(間接経費) 11,040,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題の目的は、「フード・セキュリティ(食料安全保障)の人類学」のあらたな構築であった。「食」は人間の生の基本であるとともに、「貧困」と「人間の安全保障」という根本的な問題と密接に関連している。ネオリベラリズムに基づくグローバル化の進展の結果、先進国と発展途上国の区別を問わず、食の問題が世界規模で深刻な課題となっている現在、フード・セキュリティに関する総合的な人類学的研究の可能性を開拓する必要があった。世界各地における人類学的臨地調査と理論的研究、および開発研究者や理科系研究者との連携を通じて、具体的な諸事例を総合的な観点から検討し、ホームページへの掲載や出版によって成果を公開した。

研究成果の概要(英文)：The aim of this research project was to newly establish "anthropology of food security." Food/diet is fundamental to the life of human beings, and it is closely related to other fundamental issues of poverty and human security. As a result of the neoliberalism-based-globalization, food/diet has become a serious global issue in today's world, both in developed and developing countries, and there was a dire need to explore a possibility of comprehensive anthropological studies on food security. We have conducted theoretical survey and anthropological field research in different parts of the world, and examined concrete empirical cases from a comprehensive perspective, through the collaboration with researchers in development studies and with scientists on food safety. The research findings and results have already been up on the website and published as reports, articles and books.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学・文化人類学、民俗学

キーワード：フード・セキュリティ 食品安全 流通・分配 農業・漁業 紛争 都市(化) 貧困 嗜好性

1. 研究開始当初の背景

ネオリベラリズムに基づくグローバル化の進展の結果、先進国と発展途上国の区別を問わず、食の問題が、質量の両面において、また生産・獲得と供給・分配の各側面において世界規模で深刻な課題となっていた。

これに対して、「食」「貧困」などの「人間の安全保障」の根底にある問題を取り扱う枠組みを根底から考え直す必要が生じていた。

2. 研究の目的

本研究課題が目指したのは、グローバル、リージョナル、ナショナル、ローカルという各レベルのからまり合いに注目しつつ、貧困概念を、現代の文脈の中で批判的に再検討するとともに、フード・セキュリティに関する総合的な人類学的研究の可能性を開拓することであった。

3. 研究の方法

世界各地における人類学的フィールドワークと理論的研究、および開発研究者と理科系研究者との連携を通じて、総合的な観点から、「食」「貧困」「人間の安全保障」に関する諸課題を具体的な事例を通して検討した。

検討に際しては、国内外で頻りにワークショップを開催し、異分野の研究者、現地の研究者や実務家、あるいは、一般の住民と対話を図ることによって、課題を複眼的視野から分析するように努めた。

また、これらのワークショップの検討結果を核として、ブックレットの形態で成果発表を行うようにした。

4. 研究成果

<2010 年度>

参加研究者が、それぞれの担当地域において現地調査を行い、フード・セキュリティに関する個別のデータを収集した。現地調査を行った研究者と担当地域は、中国・内モンゴル(思)、ベトナム(住村、山崎、原田、ソン、李)、南部スーダン(栗本、岡崎)、東ティモール(松野)、マラウイ・ウガンダ・ザンビア(ポチエ)、タイ(石高)、ブータン(上田)、インドネシア(阿良田)、フランス(中川)であった。

日本国内で、「貧困とフード・セキュリティ」および「フード・セキュリティと紛争」の2つのワークショップを開いた。

「貧困とフード・セキュリティ」では、日本とインドネシアにおける貧困層の生活実践に関する発表を通し、日本の貧困層に関する調査に着手するにあたっての具体的な内容と方法を検討した。

「フード・セキュリティと紛争」では、メンバー4名を含む8名の研究者らが、主に紛争地域における食料確保の土着システムについて事例を報告しあい、単なる支援物資の供給ではないフード・セキュリティのあり方について理解を深めた。

<2011 年度>

参加研究者が、それぞれの担当地域において現地調査を行い、フード・セキュリティに関する個別のデータを収集した。現地調査を行った研究者と担当地域は、中国・内モンゴル(思)、ベトナム(住村、ソン、李)、東ティモール(松野)、インドネシア(阿良田)、ブータン(上田)、南スーダン(栗本、内藤)、エチオピア(岡崎)、エリトリア(ロベル)、マラウイ(ポチエ)、南アフリカ(早川)、日本・秋田(思、本庄)であった。

中国の北京で、国際シンポジウム「グローバル化と少数民族の食・安全・健康」を開催し、思、住村、三田らが発表した。

また、大阪大学において、「フード・セキュリティの人類学的研究ワークショップ(I)」を開催し、「労働・共有」、「紛争と危機」、「食に関する文化」、「近代社会と都市」の4つのセクションに分かれて17人が報告・討論をするとともに、今後の研究課題の実施概要について確認した。

<2012 年度>

参加研究者が、それぞれの担当地域において現地調査を行い、フード・セキュリティに関する個別のデータを収集した。現地調査を行った研究者と担当地域は、ベトナム(住村)、内モンゴル(思、住村、栗本、宮本、ササル)、ウガンダ(ポチエ)、インドネシア(阿良田)、ロシア・ブリヤート共和国(チムゲ)、ブータン(上田)、石高(タイ)、南スーダン(栗本、内藤)、アラスカ(岸上)、ベトナム(栗本、宮本、阿部、吉田)であった。

内モンゴル大学において、国際ワークショップ「モンゴル地域の都市部における食生活の変化と安全性」を、また、カントー大学において、「メコンデルタにおけるフード・セキュリティ、フード・セーフティ、環境」を開催し、異分野、異地域を専門とする研究者が発表を行い、意見交換を行った。

<2013 年度>

最終年度である平成25年度においては、現地調査はフォローアップに必要な最小限のものにとどめた。平成25年度までの調査研究の成果を踏まえて、12月に大阪大学で国際シンポジウムを開催し、国内外の研究者および実務者(8カ国、23人)が参加して発表と議論を行い、フード・セキュリティの人類学的研究の新たな構築について最終的な総括をおこなった。この結果、グローバル化や近代化の進展の結果、食の問題が質量の両面において、また、生産・獲得と供給・分配の各側面において、先進国と発展途上国の区別あるいは地域を問わず深刻な課題となっており、個々の地域で個別具体的な形で問題化していることが明らかになった。また、当該テーマについて問題を対象化する共通の枠組みや、多分野が連携した研究の必要性につ

いて理論的考察が行われ、一定の共通認識が得られた。

<総括>

本研究課題において、得られた結論は以下の4点に集約させる。

① 量と質

食料の量と質は、人間の安全保障が重要となる援助などの局面においてのみ、問題化されるものではない。

食料の生産において、量を追及することは、しばしば質の悪化（食品の不安全）をもたらし、さらには、環境の悪化などもあって、長期的な視野で人間の安全保障を脅かすことになる。

また、食料の安全保障が問題のかなり根底な部分に、文化的に規定される食料の質（ハラールなど）が関わっていることが明らかになった。

② 土着の食料確保戦略

各地域には、異常気象などの緊急時において、土着の食料確保戦略を持つ例が多くみられ、現在のフード・セーフティにおいても、応用できる可能性があることが示された。

③ 都市と食料

アフリカなどの事例から、都市化によって農地が失われる一方、都市住民によって都市における自給的農業がおこなわれるようになり、フード・セキュリティの一端を担うようになっていくことが明らかになった。

④ 環境と食料

①で述べたように、世界的な人口増加の圧力から、環境安全保障と食料確保（人間の安全保障）は、しばしば、二律背反の問題となりつつある。今後は、ローカルな食料の問題は、グローバル環境と関係し、量や貧困の問題は、リスクの問題と相関関係を持ちながらローカルな場に巢食うことになることが、フードチェーンにおける薬剤耐性菌の事例などから明らかになった。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 29 件）

- ① 岸上伸啓 「アラスカ北西地域におけるイヌピアットの食料の安全保障論」『人文論究』査読有、83、2014、75-84
- ② 思沁夫 「日本農業近代化の問題とその理論的意味」『中国農業大学学報（社会科学版）』査読有、52(3)、2013、31-50
- ③ 思沁夫 「中国における環境問題：リスク・保護・協働」『第七回現代中国と東アジアの新環境：発展・共識・危機に関する国際学術シンポジウム論』査読有、2013、42-53
- ④ 李俊遠 「漁獲物の販売過程で現れる漁民と中間商人の経済的関係の特徴とその意味」『島嶼文化』査読有、41、2013、193

-221

- ⑤ 岸上伸啓 「米国アラスカ州バロー村のイヌピアットによるホッキョククジラ肉の分配と流通について」『国立民族学博物館研究報告』査読有、36(2)、2012、147-179
http://ir.minpaku.ac.jp/dspace/bitstream/10502/4749/1/KH_036-2_001.pdf
- ⑥ Kishigami, N. “On Sharing Bowhead Whale Meat and Maktak in an Inupit Community of Barrow, Alaska, USA” 『北海道立北方民族博物館研究紀要』査読有、22、2013、1-20.
- ⑦ Kishigami, N. “What is a Subsistence Activity?: With a Special Focus on Beluga Whale Hunt by Inuit in Arctic” 『人文論究』査読有、82、2013、79-90.
- ⑧ Yamasaki, S. (他6名) “Prevalence of *Vibrio Cholerae* O1 El Tor Variant in a Cholera-Endemic Zone of Kenya” *Journal of Medical Microbiology*, 査読有、63、415-420.
- ⑨ 山崎伸二、朝倉昌博 「食中毒細菌カンピロバクター属菌の簡便で迅速な好感度検出キットの開発」『ニューフードインダストリー』55(1)、2013、13-20.
- ⑩ 岸上伸啓 「米国アラスカ州バロー村におけるイヌピアットの捕鯨祭ナルカタックについて：祝宴における共食と鯨肉び分配を中心に」『国立民族学博物館研究報告』査読有、37(3)、2013、393-419
- ⑪ Sumimura, Y. and Trinh Hong Son “Nutritional Status of Mothers and Children in a Mountainous Commune in Ninh Binh Province in Viet Nam”, *Journal of International Health*, 査読有、27(4)、2012、363-371、
<http://book.nhlib.cn:8080/handle/123456789/7278859>.
- ⑫ 思沁夫 「母鹿の歌とエヴェンキ人の自然観」『エヴェンキ研究』査読有、16、2012、3-19
- ⑬ 湖中真哉 「アフリカ牧畜社会における携帯電話利用：ケニアの牧畜社会の事例」杉本星子（編）『情報化時代のローカル・コミュニティ：ICTを活用した地域ネットワークの構築：国立民族学博物館調査報告』査読有、106、2012、207-226
- ⑭ Lee, J. W. “The Economy of Coexistence in a Vietnamese Coastal City” 『韓国文化人類学』査読有、45(2)、2012、77-108.
- ⑮ 思沁夫 「エヴェンキ人と『肉』（トナカイとヘラジカを中心に）：文化と生体の視点から」『鄂温克研究』査読有、1・2期（総45期）、2011、59-71
- ⑯ Arata, M. “Overcoming Fuel Crisis Using Social Safety Nets: ‘Kerosene-to-LPG Conversion Program’ in Sundanese Village, West Java, Indonesia”, *Asian Rural*

Sociology, 査読有、4 (2)、2011、380-390.

http://arsal1996.org/pictures/pdf/ARSA_IV_PRCDS_VOL2/STRATEGIES%20IN%20RESPONDING%20TO%20THE%20CHANGING%20ENVIRONMENT,%20ENERGY%20AND%20ECONOMY/2.%20Mariko_Arata_380-.pdf

[学会発表] (計 120 件)

- ① Ueda, A. “Food Security and Coping Strategies in Rural Bhutan: Between Self-Interest and Altruism” The Agrarian Change Seminars, 2014 年 1 月 23 日、ロンドン大学 School of Oriental and African Studies (SOAS).
- ② Pottier, J. “Food Insecurity and the Urban Poor: Lilongwe and Kampala Compared” SOAS Food Forum, 2014 年 1 月 17 日、ロンドン大学 School of Oriental and African Studies (SOAS).
- ③ 阿良田麻里子 「インドネシアのハラール認証制度、ムスリム消費者の食行動や食の選択などについて」第 79 回 JANNI 連続講座、2013 年 1 月 13 日、日本国際ボランティアセンター
- ④ Kurimoto, E. “Armed Conflicts in South Sudan since 2005: Old and New, an Attempt of Classification and Contextualization” International Forum, “Peacebuilding and ‘African Potentials’: Harmonizing Approaches from Above and Below in South Sudan and Beyond,” jointly organized by the Center for African Area Studies, Kyoto University and the Centre for Peace and Development Studies, University of Juba. December 06, 2013. Juba, South Sudan.
- ⑤ Sumimura, Y. “Food, Chemicals and Modernization in Vietnam” Report Meeting of GLOCOL Joint Research, 2012 年 11 月 21 日、NIN Vietnam.
- ⑥ 思沁夫 「食と健康におけるモンゴル人が直面する課題について」モンゴル人の食文化と食安全に関する国際会議、2012 年 7 月 14-15 日、内モンゴル大学
- ⑦ 中川理 「市場の文化と〈遅れ〉: フランスの青果市場の事例」日本文化人類学会第 46 回研究大会、2012 年 6 月 23-24 日、広島大学
- ⑧ 栗本英世 「フィールドの人類学: スーダンでの出会いと国立大学における人類学の可能性」国際ワークショップ『モンゴルの環境問題と協力』2010 年 9 月 5 日、モンゴル国立大学
- ⑨ Ueda, A. “Chilli Trading Practices in Bhutan: Past and Present” 12th Seminar of the International Association for Tibetan Studies, 2010 年 8 月 15-21 日、ブリティッシュコロン

ビア大学 (カナダ) .

[図書] (計 57 件)

- ① Pottier, J. “Urban Hunger and the Home Village: How Lilongwe’s Migrant Poor Stay Food Secure”, N. Domingos, J. M. Sobral and H. G. West (eds.) *Food Between the Country and the City: Ethnographies of a Changing Global Foodscape* 2014, 107-26, London: Bloomsbury.
- ② Ueda, A. “Understanding the Practice of Dual Residence in the Context of Transhumance: A Case from Western Bhutan”, S. Kumagai (ed.) *Bhutanese Buddhism and Its Culture*, 2014, 153-169, Kathmandu: Vajra Publications.
- ③ 思沁夫 (編著) 『モンゴルの食と生業の現在』(GLOCOL ブックレット 16) 2014、92、大阪大学グローバルコラボレーション・センター
- ④ 思沁夫 (編著) 『中国における食品の安全・安心』(GLOCOL ブックレット 10) 2013、145、大阪大学グローバルコラボレーション・センター
- ⑤ 松野明久、中川理 (編著) 『フード・セキュリティと紛争』(GLOCOL ブックレット 07) 2012、119、大阪大学グローバルコラボレーション・センター
- ⑥ 岸上伸啓 『北極海の狩人たち: クジラとイヌピアットの人々』2012、133、風土デザイン研究所
- ⑦ 栗本英世 「内戦下で人びとはなにを食べていたのか: 南部スーダンにおける生業、市場、人道援助」松井健 (編) 『グローバル化と〈生きる世界〉』2011、249-293、昭和堂
- ⑧ 住村欣範 (編著) 『ベトナムにおける栄養と食の安全』2011、111、大阪大学グローバルコラボレーションセンター
- ⑨ 栗本英世 「意図せざる食の経済: 人道援助と難民キャンプにおける食の充足」中島康博 (編) 『食の経済』(食の文化フォーラム 29) 2011、64-86、ドメス出版
- ⑩ 栗本英世 「コミュニティから平和を創る: 南部スーダンの現場から」藤原帰一、大芝亮、山田哲也 (編) 『平和構築・入門』2011、126-150、有斐閣
- ⑪ Luu Dam Ngoc Anh, Luu Dam Chu, Ninh Khac Ban, Sumimura, Y. “Status of Colorant Plants in Socio-Economy Life of Ethnic Minority Groups in Mountainous Area in Northern Vietnam” VAST (ed.) *The First National Scientific Conference of Vietnam Natural Museum System*, 2011, 206-213, Hanoi: VAST.

[その他]

ホームページ等

<http://www.glocol.osaka-u.ac.jp/research/kaken/22242029.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

栗本 英世 (KURIMOTO, Eisei)
大阪大学・大学院人間科学研究科・教授
研究者番号：10192569

(2) 研究分担者

住村 欣範 (SUMIMURA, Yoshinori)
大阪大学・グローバルコラボレーションセンター・准教授
研究者番号：30332753

思 沁夫 (SI, Qinfu)
大阪大学・グローバルコラボレーションセンター・特任准教授
研究者番号：40452445

上田 晶子 (UEDA, Akiko)
大阪大学・グローバルコラボレーションセンター・特任准教授
研究者番号：90467522

(3) 連携研究者

中川 理 (NAKAGAWA, Osamu)
立教大学・異文化コミュニケーション学部
異文化コミュニケーション学科・准教授
研究者番号：30402986

湖中 真哉 (KONAKA, Shinya)
静岡県立大学・国際関係学部国際関係学科・教授
研究者番号：30275101

(4) 研究協力者

Johan Pottier
SOAS, University of London・Emeritus
Professor

松野 明久 (MATSUNO, Akihisa)
大阪大学・国際公共政策研究科・教授

岸上 伸哲 (KISHIGAMI, Nobuhiro)
国立民族学博物館・教授

Trinh Hong Son
Nutrition Information, Education and
Communication Center (NIEC), NIN・
Director

山崎 伸二 (YAMASAKI, Shinji)
大阪府立大学・大学院生命環境科学研究科・教授

阿良田 麻里子 (ARATA, Mariko)
東京工業大学・大学院イノベーションマネジメント研究科・特任講師

李 俊遠 (Lee, Joonwon)
国立慶北大学・非常勤講師